

「トイレの神様」が命を救う！

もし災害が発生したらトイレはどうなるの？避難所のトイレは誰が掃除するの？過去の災害の教訓から「トイレの神様」の唄が人の命を救う！

阪神・淡路大震災後で最も困ったのは「生活用水」という声が多かった。ここでいう生活用水とは、飲料水ではなく、トイレや洗面、掃除に使用する水のこと。

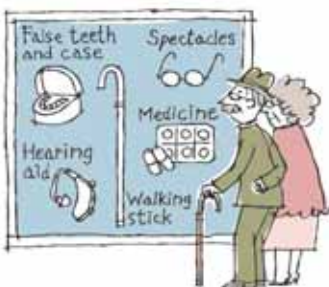
大地震発生から数時間が経って緊張から解き放たれたとき、いやおうなくやってくるのが生理現象。

トイレで検証してみると、必要な水は便器の種類によって異なるが、1回の水洗にペットボトル4本分は必要。倒壊を免れた自宅や避難所も断水によって水が使えず水洗トイレは使用できなくなる。

自宅の水洗トイレが使用できる場合、トイレ用の水の確保が必要になるが、グリーンシティには防災井戸がある。近くに川があればその水も利用可能。

自宅のトイレが使用できない場合は、水を使わないダンボール型トイレ等の簡易トイレで対処する方法がある。これらは市販されているが、ダンボール箱やバケツにゴミ袋・レジ袋を使用して自作もできる。一回使う毎に袋を取り替えれば何度でも使える利点がある。また、自宅の便器が壊れていなければ、便座にビニールをかぶせて簡易便器として利用することが可能。ただ、気をつけなければいけないのは、トイレトーパーや汚物の後始末。いつものように流すと詰まりの原因になる。トイレトーパーと汚物は別々にゴミ袋に入れてしっかりと袋を結び、指定のゴミ捨て場に指示通りの分別をして捨てる意識とそのルールも必要になる。

災害が発生すると自治体は、仮設トイレを避難所や公園に設置する。車中で生活をしている人々は、近場の木陰で用を足すなどしている人が大半だった。「所構わず用を足すのは絶対にNG！」多くの人たちがこのような処理をすると、街中は非常に不衛生な状態になる。排泄物には、細菌が発生し伝染病を引き起こす可能性がある。自宅や車中生活を送る人たちも、少し遠くても避難所や公園に足を運び、臨時の仮設トイレを利用する必要がある。



また仮設トイレは、非常に詰まりやすいという問題がある。詰まった時は、汚物を取り除いて掃除をすることが必要。トイレタンク内の積み上がった汚物を棒でならし、タンク容量を有効にする作業など、こういった場合に、他人を思いやる気持ちになって「**トイレボランティア**」を行う必要性がある。

仮設トイレが設置できない場合は、簡易組立式トイレを配布することもある。しかし阪神・淡路大震災では、供給された組立式トイレの組み立て方が判らず、すぐ使えずに放置されていたというケースがあった。

避難所のトイレには、中に入れられないほど汚れてしまった所もあった。

「不潔なトイレには入りたくない」や「トイレを汚すのが悪い」という理由から、水分や食べ物を摂ることを拒んで衰弱した人や便秘になった人、そして我慢をし過ぎて心疾患になってしまった事例も多々ある。

また、車中で生活する人の中で水分もとらずに過ごして「**エコノミッククラス症候群**」になった事例もある。

給水車をあてにしてトイレに汚物を溜めたりせず、自分で汚したら自分で掃除をし、あとの人が気持ちよく使える環境を整えることが大切。多くの人たちが使うものなので、綺麗に使用するのが当然のマナー。

阪神・淡路大震災の時、神戸の小学校で子どもが学校のトイレを日頃から掃除していたところは、子ども達が大人達に掃除の方法を教え、避難所生活中でもトイレが綺麗に保たれていた。災害が起こってから対応しようとするのではなく、日頃からトイレを大切に使い、きちんと掃除する心がけが震災時にも活きた事例。被災地でのトイレ管理は、人の生命に関わる大事な問題。

「トイレの神様」が流れるようになってからトイレに行った人は、みんな頭の中にこの唄が流れている。この唄のおかげでトイレ掃除が楽しく感じられるようになったとも言われている。災害発生時に避難所のトイレで、この唄を流しておくともみんながトイレを綺麗に使用するようになるだろう。そうすればトイレがい

つも綺麗で、トイレを我慢することもなく、心疾患になることもなければ、命を失うこともないという**命を守る連鎖**ができあがる。「**トイレの神様**」の唄が人の命を救う！

